

「祝福の原則」

Ⅱ列王記 18:7-12

【1】序

ヒゼキヤの信仰生活は私たちにとっても他人事ではない。信仰者であるならば一人ひとりが日々そのような戦いの中にあることと思う。今日は敬老祝福式が行われたが、ここに集う一人ひとりの生涯もまた主の御手の内にある生涯である。ヒゼキヤも神の御前にあっては被造物であり、偉大な神の恵みによって救われた一人である。そして、この神の御恵の中を生かされて行く生涯は私たちも同じなのである。

【2】幸いについて（詩篇 1 篇）

今日のテーマは「祝福の原則」ということだが、はじめに私たちにとっての幸いとはどういうことであるかを考えたい。聖書の中で幸いについて教えている典型が詩篇 1 篇に見出される。

ここには幸いな人の姿が「流れのほとりに植えられた木」として描かれている。その人の原動力となる力はどこから来ているのか、それは流れ（水）に表されていることであり、神ご自身のみことばである。その人の人格そのものがどこに置かれているかが重要なのである。幸いな人は、神ご自身の臨在にいつも触れている者である。

ヒゼキヤは「主に堅くつき従って離れることがなかった」(18:6)とあるが、まさに彼は流れのほとりに植えられた木であった。

【3】成功を収めた

このようなヒゼキヤは「どこへ出て行っても成功を収めた」(18:7)とある。主がともにいてくださったので、彼は成功（勝利）することができたのであ

る。このことは、ヒゼキヤに何か優れている政治的手腕があったのではないことを示している。彼が評価されている点は神に従ったということである。この成功はヒゼキヤの功績ということではなく、成功の主権者は主なる神にあった。

これは特別な恵みということができる。なぜなら、私たちには苦難の問題がいつもあるからである。しかし、キリスト者は苦難の只中にあっても神の御手の中で、神の摂理に生きる存在である。何が起こってもそこに神の許しとご計画のあることを感謝したい。

【4】アッシリアへの反逆

ヒゼキヤはアッシリアのプレッシャーの中でもこの国の王に反逆し、仕えることをしなかった。ヒゼキヤにとってアッシリアに隷属した状態も神への反逆になる一つのしるしであった。そこで彼は大胆にアッシリアの支配を拒み神に従ったのである。主のみこころを知ったキリスト者は大胆になれる。それは、主自らがそこで働かれることを信じている故の大胆さである。

私たちはその生活におけるすべてが主の支配のもとにあるということに信じているだろうか。この主の主権の支配のもとにあることを認めた時、大胆に生きることの出来る自由を得る。ヒゼキヤは自分の経験にも、かつてのイスラエルの歴史にも頼らない自由を得ていたのである。彼は信仰によって自由にただ主に従って生きることを喜んでいたのである。徹底した神への献身が私たちに大きな祝福となるのである。

ヒゼキヤはただ主のみこころでないことを退け、主に従う以外に道なしとして歩いたのである。み心を求め祈り、神を恐れる歩みを神は祝福されるのだ。